



中央大学学会白門化学クラブ支部

白門化学クラブ会報

第4号（会員寄稿特集）



平成 23 年 9 月 30 日発行
中央大学学会白門化学クラブ支部
〒112-8551
東京都文京区春日 1-13-27
中央大学工学部応用化学科内
白門化学クラブ事務局

平成 23 年 10 月 10 日
運用開始予定
E-mail: hakumon-kagaku
@gakuinkai.com
URL: <http://www.gakuinkai.com/hakumon-kagaku/>

白門化学クラブ支部の皆様へ

白門化学クラブ会報第4号をお届けします。

日本は東日本大震災、原発事故から未だ力強い第一歩を踏み出せていません。被災地の方々をはじめ多くの市民は日々の生活の中で着々とその立て直しに頑張っています。それら努力が一本の太く強い縄となるよう願うものです。

朝日新聞社発行週刊誌「アエラ ’ 11.10.3 No.45」に大学は「愛校心」で選べ」という記事があります。中央大学は、①新制大学以降の延べ卒業生数 4位(445,617人) ②同窓会会員の会費納入率 28位(27.4%) ③卒業生からの寄付金額(学生一人当たり)5位(14,711円) ④大学ウエディング件数 データなし ⑤ホームカミングデー来場者数 データなし ⑥大学職員の母校出身者比率 6位(67.5%) という調査データを掲載しコメントしています。記事の結論として「大学と学生、卒業生がwin-winの関係にあること。それが愛校心の強い大学の特徴だ。」としています。

中央大学創立125周年記念プロジェクトがひとつの締めくくりを迎え、中央大学より当支部に対して感謝状が贈られました。長年にわたる皆様のご協力に深く感謝申し上げます。

中央大学学員会平成23年度定時協議員会・定時学員総会において、白門技術士会支部に支部旗が贈呈されました。この支部の設立には、長年にわたり金川 護様(工業化学科第10回昭和35年卒)が尽力され、初代支部長として活躍されています。

懸案のホームページを学員会サーバー上に開設し、ネット上での学員会支部の仲間入りをします。これを機に、地域、年次、職域等支部との縦、横、斜めの絆により、中央大学学員としての活躍と懇親の場が広がることを期待します。

なお、本来、総会でご承認いただくべき「平成22年度事業・決算」、「平成23年度事業計画・予算案」につきましては、総会取りやめのため、幹事会による審議をもって、承認と本年度の運用をさせていただいております。また、平成23年度は役員改選の年ですが、平成22年度役員が平成24年度総会まで引き続き務めさせていただいております。皆様のご理解とご了承をいただきたくお願いいたします。

支部長 堀中 新一
幹事長 近藤 明義

追伸

中央大学学員会による「東日本大震災被災学生奨学金」募金に、幹事会に諮り、当支部として金一万円の支援を行いました。

平成 22 年度活動報告(平成 22 年 10 月 1 日～平成 23 年 3 月 31 日)

1. 支部学員動向

期初 244 名 退会 4 名 入会 4 名 現在 244 名

(入退会者については会報 3 号で報告済)

2. 総会の開催

平成 22 年 9 月 25 日(土) 中央大学後楽園キャンパスにおいて開催 会員 24 名出席

詳細は会報第 3 号にて報告済

3. 会報の発行

平成 23 年 3 月 31 日 第 3 号を発行済

4. 幹事会の開催

平成 23 年 2 月 4 日(金) 中央大学後楽園キャンパス食堂(出席者 9 名)

主な議題:平成 23 年度総会、HP 開設、会報第 3 号

5. 特記事項

1) 3.11 東日本大震災の発生により、平成 23 年支部総会の中止を決定した。

2) 中央大学学員会へ東日本大震災募金を行なった。

6. 学員会関係

1) 会議 平成 23 年 3 月 17 日(木)第 3 回幹事会(堀中出席)

平成23年度活動計画(平成 23 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日)

1. 白門化学クラブ会報第4号、第5号の発行

白門化学クラブ会報第 4 号は、平成22年度総会が中止となったことによる報告事項等を掲載して、9 月末に発行します。

第5号は平成 24 年度総会(5月開催予定)の案内とします。総会出欠通知葉書を同封し、平成24 年 3 月末に発送予定といたします。

2. 支部ホームページの開設と運用

10 月より中央大学学員会サイトにリンクし運用を開始します。当初、学員会ホームページ作成の助成基準をクリアするページのみでスタートし、逐次、内容の充実を図ります。

3. 平成 24 年度総会準備

平成24年5月、中央大学後楽園キャンパスでの開催として準備を進めます。従来同様、講演会・総会・懇親会という構成とします。

4. 白門化学クラブ支部会員名簿の整備

平成 24 年 3 月の会報第 5 号発送時同封する総会出欠通知葉書に記載いただいた事項をもとに会員名簿の整備を行い、平成 24 年度に会員名簿の発行を行います。

会員寄稿

東日本大震災・津波で消えた故郷を訪ねて

阿部富男（第13回昭和40年卒 東京都北区在住）

私は昭和40年卒で、製薬会社「エーザイ株式会社」に定年まで勤務し、第二の人生として、何か社会に貢献しようと思い不動産業（有）阿部コーポレーションを起こし、小規模ながら順調に推移しております。最近、事業は息子に任せ、小生はボケ防止とボランティアと思い商店街の役員をして元気で過ごしております。

今春、3月11日東日本大震災が発生しました。

私の故郷は、宮城県牡鹿半島の青い海と美しい海岸線にある小さな漁村「女川町塚浜」です。3km先には東北電力女川発電所があります。私は7人兄弟の次男として生まれ、中学時代3年間は、夏になると漁師の父と一緒に毎朝4時起きしスズキのはえ縄漁に連れていかれ、朝6時に来る定期連絡船で女川中学校に通い暮らしていたところです。その中学のある漁港「女川町」も我が生まれ故郷「塚浜」も、この大震災と大津波で壊滅的被害を受けました。

震災時の14から15日間は、兄弟姉妹と電話も携帯電話も連絡つかず安否確認取れず不安の毎日でした。京都にいる娘の手助けにより、携帯メール・インターネットで実家の兄夫婦が女川原子力発電所の体育館「避難所」に無事避難、石巻市の弟2家族とも家屋全壊で小学校「避難所」に無事避難、仙台市の2姉妹1弟家族は屋根瓦落下被害も、各自宅で無事避難と、兄弟姉妹家族全員が無事であることが確認できました。今回の大震災では、命が助かれれば良しとしなければならぬと自らを慰めております。

震災24～25日後に京都にいる娘の夫が「ふるさと塚浜」の震災前（写真1）・震災後（写真2）航空写真をインターネットで探しあてたといってお送りしてくれました。この写真を見て、悲惨さに言葉を失いました。



写真1 震災前の故郷・漁村[女川町塚浜]航空写真



写真2 震災後の故郷・漁村[女川町塚浜]航空写真

この消えた故郷は、昔、平家の落人たちが逃げ延びてきて築いた漁村と父から聞いたことがある、ここまで築くのに数百年かかったのだから復興するまで数十年かかるかもしれない。或いは、

このまま復興しないかもしれない。

この故郷だった漁村は、高台にある先祖のお墓だけが残り、住む家もなく、漁村なのに舟もない、お金もないから家も建てられない。舟も網も買えないから、しらす・いわし・小女子・スズキ・タコ等の魚も取れない、ウニ・アワビも取れない、名産のわかめ・ホヤ・ホタテ・かきの養殖も出来ない。

海は、宝庫なのだ、宝物が自然に増殖するところなのだ、国・県・市・町はこの宝庫を活用する復興策をねり実行すべきだ等、思いが頭を駆け巡る日々が続いています。

震災後 4. 5ヶ月経ち、既に東北新幹線が開通し仙台より先のお墓までの道路も出来ているとの情報から、レンタカーを借り息子夫婦と私と妻との4人で、仙台を拠点に7月23・24・25日の3日間、昨年5月に無くなった母の2ヶ月遅れの1周期お墓参りと、石巻の仮設住宅に移り住んでいる3兄弟家族、仙台で被災自宅住まい2姉妹1弟家族の見舞を兼ねて、故郷を訪問しました。この故郷の状況を見て、あまりの悲惨さに絶句しました。兄との話の中、震災3月11日は、寒い真冬で小雪降るなか、コートを着たまま津波に流され、急な坂の立ち木をつかみ、津波の引き潮に負けず、上げ潮で押し上げられる度に、木の小枝に縋り付き、足腰の悪い78才の兄夫婦2人必死で逃げ、生きのびたとのこと、聞くも涙、語るも涙の状況でした。

今回の東北大震災の真只中であって、兄弟姉妹家族全員無事だったことを喜んでおります。最後になりますが、福島原子力発電所事故の収束見通しがたっていないことと、消えた故郷にも女川原子力発電所があるが、気懸かりであり恐ろしさを感じております。

以上、近況報告であります。(H22.8.20 記)

近 況

高倉英壽(第25回昭和52年卒 東京都練馬区在住)

定年まで 後数年となり 後進の指導が中心に 仕事をやっています。

特に ここ2~3年間は 海外工場(ブラジル、中国、タイ、アメリカ)と 年間 2~3ヶ月間連続で 出張しており 年に夏が2回あったり、冬が2回あったり 季節感がなくなっています。今年も 3月11日の大震災時には、ブラジルにおり、朝 インターネットを見て 驚いていました。案外早く日本の家族とも連絡がとれ、4月1日に帰国時には 停電もなくなっていました。



地球の裏側のブラジルでも 大震災に対して 募金活動があつたり、面識もない人からも「大変だが 頑張つて」と声を掛けられました。何処の国に行つても お互い尊重しながら 丁寧にものづくりを指導していこうと思う 今日この頃です。添付の写真は ブラジル工場の従業員宅でシュラスコを食べながら 従業員の子たちと撮ってもらった写真です。◇

近況報告

金嶋八郎（第2回 昭和29年卒業 福井県越前市在住）

卒業以来すっかりご無沙汰しています。

御指名を頂きましたので、卒業後の経過を簡単に御報告します。昭和29年3月卒業後福井県に戻り、4月より美浜町耳中学校に3年間在職、昭和32年4月より県立鯖江高等学校に転勤し理科（化学）を担当しました。当時は小学区制で、生徒は居住区の高校にしか進学できませんでした。各学校共如何にして大学進学率を高めるかと、毎日四苦八苦していました。5単位の化学を2, 2, 1の3つに分け、2時間通しの授業（実験）を展開、張り切っていました。所が昭和30年代に入り、急に工業が盛んになり工業高校の新設が相次ぎました。

所詮 工業ブームの到来です。福井県も例外でなく、1校しかなかった工業高校が昭和34年より順次、武生工業、敦賀工業、春江工業、大野工業が新設され5校となりました。当然工業の教員が不足します。教育委員会は工業関係学校の卒業生を優先して配置しました。私も昭和37年4月武生工業高校に転勤しました。学科は、土木建築、電気、工業化学の3科でした。校舎も殆んど出来ていないので、旧女学校校舎を利用する毎日でした。実習室の設計から機器の配置と、すべて手さぐりの状態でした。定性、定量分析は基本ですが、3年生の実習をどうするかで、当時大変苦労しました。私は機器分析を担当しましたので、どのテーマを取り入れるかに頭を悩ました。たどり着いたのが、導電率測定、吸光分析、ポーラログラフ分析、ガスクロマトグラフ分析、赤外線分析、元素分析等でした。校舎建設も順調に進み、昭和40年代には土木建築が分離し、4学科となり1学科2級となり、総計24学級の工業高校となりました。まさに工業全盛時代でした。しかし、工業ブームも長続きせず、昭和50年代に入ると学級数を徐々に減少し、生徒数も半減しました。現在は工業高校の縮小案まで浮上しています。私は平成2年3月教頭で武生工業を定年退職しましたが、工業での28年間はまさに天国でした。なつかしい思い出で一杯です。

話は変わりますが、鯖江高校に居るとき剣道部の顧問となり、以来剣道の「とりこ」となりました。昭和48年には六段の合格、生徒も県大会で個人、団体共にダブル優勝し、徳島インターハイに出場しました。昭和51年には、武生市体育館でインターハイ剣道大会を開催し、総務委員長として計画立案にかかわりました。

退職後は市の丹南青少年愛護センター南越支所長を3年、福井工業高等専門学校保健体育（剣道）講師を平成10年3月まで勤め停年退職しました。平成11年4月より福井県学校剣道連盟会長を勤め、平成18年より越前市剣道連盟会長となり現在に至っています。

平成19年10月には「ねんりんびつく茨城大会」に大将として出場しました。この大会も6回目の出場となりました。

年をとると何よりも健康が第一です。皆様の益々の御多幸、御健勝をお祈り申し上げます。◇

近況報告

増田哲彦（第27回昭和54年卒 大阪府堺市在住）

株式会社シナネンゼオミック 代表取締役社長（シナネン株式会社 取締役）

白門化学クラブへの入会の許可をいただき、本当にありがとうございます。

大学を卒業して三十年強の月日が経ちまして、皆様とまた化学のフィールドとその業界でご活躍をされている大学OBの方々との親交を持たせていただけることに本当に感謝いたしております。

昨年、54年卒業の一部の仲間と中田先生を囲む会がありとても楽しい会を持つことができたのですが、その際に、中田先生から白門化学クラブでの活動の話をお聞きしまして是非、参加させていただきたいと申し出た次第です。

実は、晴天の霹靂かどうか分かりませんが、卒業して就職致しました会社の関係会社に抗菌剤を製造している化学会社がありまして、その会社の社長を昨年から拝命致しまして、現在も悪戦苦闘しております。

親会社は東証一部に上場しておりますエネルギー卸売会社（シナネン株式会社）で私も入社以来エネルギーを販売する卸営業一筋で頑張っておりましたが、人事とは不思議なもので、突然社長から「化学会社の社長」と言われ、びっくりしたのですが、すぐにそう言えば「理工学部の化学出身だ」と自分自身に言い聞かせて、すぐに現在の会社の経営や主力商品の勉強等を始めたのが昨日のような気がしております。

現在の会社の主力商品の概要を簡単にご説明いたしますと

- ・ 1983年に当社が世界で最初に製品化させた無機抗菌剤
- ・ 抗菌性を有する銀イオンを三次元骨格構造を持つゼオライトに担持させた材料（800℃までの耐熱性を持つ）
- ・ 微生物に対して効果を発揮するものではあるが、同時に非常に高い安全性を持ち合わせている。

上記の特性を持つ抗菌剤を、現在は日本国内だけではなく、アメリカ、アジア、ヨーロッパと全世界に輸出して抗菌文化を世界中に広めることを目標として、頑張っております。

卒業以来、三十数年経過致しますが、セールスの世界で定年を迎えると思っておりました私ですが、人生とは分からないものです。

つくづく天の力を感じております。

今後は、白門化学クラブの皆様のご教示並びにご支援をお願いして私の近況の報告にさせていただきます。（平成23年9月9日記）

アナログの思い出

葉山 康雄（第 17 回昭和 44 年卒 東京都世田谷区在住）

私と中央大学との関係は、東畑教授が都立中野工業高校の岡田功先生（化学工学主任）に私設の化学工学実験要員を探している話から〈昭和 39 年・東京オリンピックの年〉です。岡田先生からの紹介状を手にして、東畑研の前でお会いしたのが中田常雄先生で、この時が面接の初日（3 月 15 日）でした。翌日から出勤ということになり、早速、東畑研の実験棟の鍵を渡されました。工業高校化学科出身の私は、実験室の仕事に自信と力量はありました。さて、その仕事は？化学プラント業界からの委託研究です。ガス吸収・集塵・フィルター・イオン交換・各装置の効率テストとその改良、化学プラント定量測定器等の試験、そして卒論生と実習生皆様の実験機のスタンバイとメンテナンスをしていました。私の卒論実験は化成肥料転動造粒機構のメカニズムの解明でした。昼は実験棟で、夜間は学生として大変充実した効率の良い日々でした。

昭和 42 年（1967 年：美濃部都知事の時代）夏休みの事、東畑研に都庁より大気汚染調査の仕事が入りました。昭和 30 年以前は“公害”と言う用語はなかったそうです、智恵子抄では「東京に”空“が無い」と、そして教科書には京浜・四日市・千葉の五井、それら工業地帯の”煙“が産業活動発展の証として国の誇り、と教えられた思いがあります。

調査隊長は都庁公害技官、出発集合は当時都庁の有った有楽町です。都庁の手配師が我々を集め、一日が始まります。調査対象は化学工場の顔料・染料・金属酸洗いとメッキ工場の排気ダクトからのサンプリングです。調査場所はこれ以外に、消防署の“火の見櫓”、国鉄の高架橋、工場の煙突や集塵機・ホッパー、色々な現場に行かされました。足場の悪いこのような場所での検出装置の設置作業は容易ではありません。この仕事を一緒に経験した卒論生諸氏にとっては、化学産業の厳しい環境 3 K（キタナイ・キケン・クサイ）を知り、それに耐える経験をしたことは大きな学習になったことでしょう。

引率する加藤先生の毎朝の言葉は「とにかく事故と怪我なき事を願っている」でした。この調査での一番の思い出は、東京タワー第 2 展望台（高さ 250m、第 1 展望台：150m）の屋上での公害ガス測定でした。多くの見学客が出入りする中、展望台に傷をつけないように装置搬送に汗を流しました。下界ではホテルのプールにパラソルの花、ここのガスサンプリングは地獄だ！

採集したガスサンプルやダストフィルターは都庁のパトロールカー（警視庁同彩色）で都の衛生局分析センターへ搬送されます。今日の自動化デジタル時代では想像出来ないでしょう。そして現場では「計算尺」でデータの整理、実に計算尺はアナログを絵にかいたような物です。東京タワーを計算尺で設計したことや、鉄材は朝鮮戦争の米軍タンク（戦車）のスクラップから材質の良い鋼材も利用したそうです。

調査は無事終了し、公害戦士白門化学隊の質実剛健を实践した、夏の陣でありました。昭和 42 年、公害の定義と公害対策基本法が成立、翌 43 年（1968 年）新設大気汚染防止法制定される。

アポロ 11 号が月面着陸した年、そして全学連の乱で、昭和 44 年は卒業式なき卒業でありまし

た。良き人との出会いと学園諸先生のご指導を得て心より感謝しており、幸せな思い出でした。

(平成 23 年 9 月 7 日記)

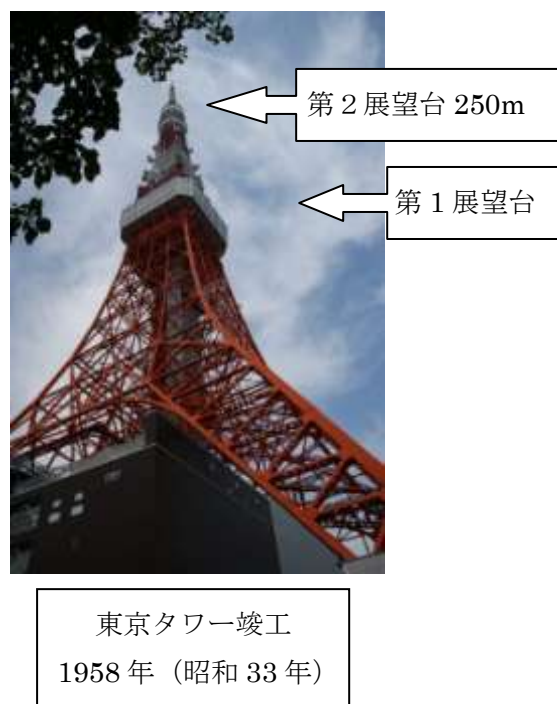
追記：

その他の思い出

- 1990 年 よみがえる卒業式 於；多摩校舎<昭和 43~44 年度卒業式>
- 文献コピー作業の苦勞；ゼロックスが高価な時代でした。

関係した仕事（思い出される方も多いと思います）

- 公害ガス、ダクト、濃度測定
- 回転円盤による湿式ガス吸収
- 集塵装置圧損と効率
- 重油パイプラインの温度降下と粘性
- 各種装置メンテナンスとガラス細工とセンサー
- 高圧噴霧造粒粒度分布について
- 超音波缶内クリーニング装置
- 都市ガス圧送とドレイン排水について
- 造粒装置単位操作装置について
- 転動ドラム造粒について（卒論）
- 化成肥料の加熱分解圧について
- 酒粕液体サイクロによる分級
- 穀物（大豆・小豆）流動層における動作密度
- エアゾル混合気引火試験（防災火薬：須藤教授）
- 溶性燐肥の熔融造粒
- 蛇紋岩のガラス質造粒



“有難うございました” お世話になった諸先生方（敬称略）

東畑平一郎、山田豊一、中田常雄、関口勲、阿部二郎、川田博美、加藤征太郎、渡辺克己、
安藤淳平、須藤秀治：服部公昭氏（プラント）：黒田氏（都庁）

近況；都立蘆花公園近くに住居を定め、循環器系の病に冒された体調回復のため、ここでウォーキングに励む毎日です。

会報への出筆の機会をいただき、昔の記憶を思い起こし、頭のリハビリにもなりました。◇

高分子化学加茂研究室の思い出

滝沢孝一（第 11 回昭和 38 年卒 埼玉県春日部市在住）

私のライフワークは、「糊」の研究（平成 21 年第 29 回総会・講演会で発表）です。これを継続出来たのは、加茂先生のご指導の賜物で感謝に絶えません。

加茂研究室は、中央大学高分子化学の伝統ある研究室（初代は古沢至誠教授）で1号館の3階でした。私は2階の醗酵化学研究室（福田憲六教授）でした。当時、高分子化学は成長産業で優秀な学生（加茂先生はそのモデル学生）が集まりました。

加茂先生は、大勢の院生、卒研を指導されながら研究の成果を出され、学会に発表して賞を受けさせたりしていました。高分子化学教室は研究に熱心で、また、のびのびと研究していたのはこの教室の特色となっていました。その後、教室も改装され、ドラフト等も整備されてきました。この頃から、オープンキャンパスが行われるようになり、研究室が尚一層スマートになったようです。男女共学の進行に伴って、女子院生が卒研指導を担当させるように仕向けておられました。年1回、秋には先生引率のゼミ旅行が1～2泊、中には3泊位のこともあり、教室のコミュニケーションを図っておられました。和やかな中にも仕事には厳しいところは古沢先生伝統の教育が息づいています。

京都国立博物館での私の研究の講演では、原稿の整理、スライドの制作に御自分の仕事であるようにお手伝いいただき、講演会場にも御出席下さいました。

最後になりましたが、加茂先生の送別会は春日駅近くのイタリアン料理店で催されました。中田先生からは1年も前から、送別会の計画をなさいとのご指示をいただいていたのですが、加茂先生のお気持ちは研究室内でしかも内輪の会にして欲しいとの御要望と、記念講演も遠慮したいとのことで質素な中にも暖かい会となりましたことをお詫び方々御報告申し上げます。その後、同窓生の強い要望により、平成23年5月21日、母校にて記念講演会が開かれました。白門化学クラブから近藤幹事長ほか支部会員が多数聴講しました。なお、白門化学クラブ支部より花束が贈られたことを書きそえます。◇

近 況 報 告

加藤真哉（第25回昭和52年卒 神奈川県横浜市在住）

大学を卒業して34年が経ちあと3年で定年を迎える年になりました。就職して最初の赴任地が博多でした。そこで結婚しましたが博多は思いで深い土地になりました。勤め先が石油専門商社ということで広島、横浜、東京、茨城と転勤を繰り返しましたが二人の子を設け大病もせず事故も無く今まで無事に過ごせたことは本当に幸せなことだと思います。仕事にかま

けて子育ては全て妻に任せきりでしたが二人ともまともな社会生活を送れる様に成長させてくれた事に深く感謝しています。去年8月、長女に娘が生まれ私もお爺ちゃんになりました。孫は子供よりかわいいと言われていますがそれは本当のことだと実感しています。つい最近も1週間ほど孫を連れて娘が里帰りをしていましたがほんの1週間でも孫の成長ぶりには驚かされました。初日はやっと立てて1歩2歩よたよた歩きましたが帰る頃には少々危なっかしいがよちよち歩きをしていました。まだ意味のある言葉は発しませんが今度来るときには何かしら話すのではないかと今から期待をしています。会社生活一筋にすごしてきましたが一区切りの定年が間近になっ

て今後どうやって社会と関わりあっていくかを考えることも現実味を帯びてきました。幸い体は丈夫で悪いところも特に無いので体の動くうちは仕事を続けたいと思っています。中央大学理工学部工業化学科を卒業したということが支えとなって困難な場面に遭遇したときも打破してこられました。人生はまだ長いですがこれからも中大卒業生として誇りを持って生きていきたいと思っています。◇

惜 別

高岸義一（第10回 昭和37年卒業 神奈川県葉山町）

同窓生の金井武夫君が去る8月31日、胃癌のため永眠しました。彼は中大卒業後も、エーザイ(株)勤務の傍ら千葉大学で研究を続け、薬学博士号を取得しました。私と彼とは、群馬県立伊勢崎工業高校工業化学科で学び、卒業後はそれぞれの道を歩んでいましたが、大学合格発表の掲示で工業化学科に彼の名前を発見しました。高校から大学卒業まで偶然にも同じ教室で学んだ唯一の「老朋友」です。私は彼の活躍ぶりを我が事として喜び、自慢して来たのに残念でなりません。この7月、同期の堀中新一君との自宅への見舞いには、「ワイシャツに着替える」と言って奥さんを驚かせました。彼にとって中大の思い出は盛装に値するものだったのでしょうか。若い頃は洋服のオシャレよりも落語の洒落を好んだ彼ですが。思い起こせば在学中は”60年安保”を軸に若者のエネルギーが世の中を動かした時代。お互いに見えない未来を夢見て昼夜フル稼働に良く耐えましたね。学友の皆さん！去りし良き日々、良き友を偲んで、金井君にご献杯をお願いします。◇



新2号館前庭

ホームページを開設します。

(平成 23 年 10 月 10 日運用開始予定)

<http://gakuinkai.com/hakumon-kagaku/>

トップページ (暫定) です。



内容は、逐次工事を行い充実させて行きます。

「会員」欄の閲覧のために、パスワードを発行します。

編集後記

本号の表紙は、文京区役所展望フロアからの中央大学後樂園キャンパスの俯瞰写真としました。幹事が手分けして、原稿依頼・ワープロ起こし、編集、印刷、発送を行なっています。次号の発行は平成 24 年 3 月、総会の開催は同年 5 月です。会報、HP への投稿をお待ちしております。

広報担当幹事 住吉 宏明